

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 秋元孝文

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之 文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 大串尚代 文学研究科委員、Ph.D.

副査 早稲田大学教育学部英語英文学科教授 石原 剛 Ph.D.

副査 立教大学文学部文学科英米文学専攻教授 新田啓子 Ph.D.

学識確認 巽 孝之

論文題目 ドルと紙幣のアメリカ文学——貨幣制度と物語の共振

主論文 『ドルと紙幣のアメリカ文学——貨幣制度と物語の共振』（彩流社、2018年）

本研究は、紙幣と文学作品が、ともに紙を媒体とした印刷物であり、読まれた時に初めて意味を発生するテキストであるという類似点に着目し、同時代の両者の間にパラレルな関係を見出す。植民地時代以来のアメリカ文学史と文化史を通時的に辿り直し、紙幣デザインや発行主体、貨幣の本位などの考察をもとに、主としてメルヴィルやトウェイン、ボーム、ロンドン、フィッツジェラルドらの代表的文学作品を再解釈し、アメリカ文学研究に新たな視点を付け加えるものである。

主論文各章は以下のように構成されている。

- 序章 ドルと紙幣のアメリカ文学——アメリカ紙幣と同時代文学の共振
- 第一章 J. S. G. ボッグスについて——紙幣と文学の比較研究のために
- 第二章 複製への抵抗——バートルビーと貨幣、そして解釈
- 第三章 『ぼろ着のディック』の見た目／出現——読むこと、読まれることと社会的上昇
- 第四章 トウェインの書いたグラントのサイン——「どちらが夢か？」とサイン・主体・金銀複本位制
- 第五章 紙の上のエメラルド・シティ——『オズの魔法使い』と紙幣制度
- 第六章 ジャック・ロンドン カンパニー・リミテッド——『暗殺局』における作者と資本主義
- 第七章 広告に似る男——『グレート・ギャツビー』と時間と貨幣
- 第八章 ウィリアム・バロウズは地域通貨の夢を見るか？——紙幣に見るアメリカのグローバリゼーションとオルタナティヴ
- 第九章 (E)X Marks the Spot——ポール・オースター『ブルックリン・フォリーズ』と9.11後のリアリティ
- おわりに アメリカ紙幣は多様化できるのか？

論文の概要

アメリカ文学の父であるベンジャミン・フランクリンは若かりし日に印刷屋として植民地紙幣や大陸通貨をデザインし印刷し、かつその図版の解釈まで自らが所有する新聞に掲載していた。アメリカ文学の起源とアメリカ紙幣の起源がともにフランクリンに求めうるという事実は、アメリカにおいて紙幣と文学の親和性が極めて高いことを暗示している。

アメリカは西洋世界において初めて公共の政府によって紙幣が発行された場所であり、その建国以前から紙幣が利用されていたが、アメリカの歴史において紙幣の発行主体や信用度は目まぐるしく変化する。独立戦争時には大陸通貨が発行されるが甚大なインフレを起こし、独立と同時に発行が停止され、その後南北戦争時まで国としての紙幣は発行されない。代わりに各地の州法銀行がそれぞれ独自の銀行券を発行し、偽札も横行、紙幣の価値は現代の我々には想像もできないほど不確かなものであった。南北戦争時にグリーンバックと呼ばれる不換紙幣が発行され、これ以降、州法銀行券は課税によって締め出され、以前のような混沌とした貨幣環境ではなくなるが、この段階でも国法銀行券や、様々な金証券、銀証券が発行されており、紙幣の国家的統一はされていなかった。19世紀末には、建国以来金銀複本位制であった貨幣の本位が、1873年にあまり注目をされぬままに銀が廃貨されていたことを巡り、大統領選の論点となる。ようやく合衆国に連邦準備制ができて、中央銀行制度による貨幣の統一がなされるのは1913年のことである。

このような数々の変遷を経てきたアメリカの紙幣には、美しいデザインのものが多いばかりか、テキストとして「読む」ことの誘惑を投げかけてくるものが多い。例えば1863年に発行された国法銀行券は、各額面の紙幣の裏面にネイティヴ・アメリカンの族長の娘ポカホントスの洗礼などそれぞれアメリカ史に置ける重大な場面が描かれているが、そこには当時の歴史認識が現在と異なることが確認されるし、1896年発行の銀証券1ドル紙幣には、建国の理念を描く憲法に合衆国の指針を求める歴史意識が描かれると同時に、紙幣の周縁に配置された政治家たちに並んで、エマソン、クーパー、ホーソーン、ロングフェローといった作家たちの名前が配置されている事実には、作家が、現在とは比較にならないほど国の正史に貢献した重要人物として認識されていたことばかりか、アメリカ文学史が意外な場所で形成されていたことが読み取れる。こうして得られた文学作品と紙幣の親和性を手掛かりに、続く9つの各章では、アメリカ文学作品（第1章はアート作品）を取り上げて紙幣との関わりから論じていく。

まず第一章「J・S・G・ボッグスについて——紙幣と文学の比較研究のために」においては、紙幣と文学を橋渡しする助走として、アメリカで1980年代から活躍した紙幣アーティストであるボッグスを取り上げ、彼が紙幣と同サイズでデザインを精巧にコピーした手書きの作品を作り、それを実際に貨幣のように支払いで使うことによって「取引き」という貨幣の働きまでも作品に取り込み、作品の価値を高騰させていった経緯に注目する。ボッグス紙幣はホンモノの紙幣と同寸同デザインであっても手書きで、そして至るところにホンモノからの変更が加えられているため、手にした者はそれをまじまじと凝視し「読む」ことになるし、プロジェクト・ピッツバーグの中の一作品は、ホンモノの紙幣と全く別の建物

をモチーフにしているにも関わらず、構図と画風が似ているために、真贋を見分けるためにはホンモノの連邦準備券が何の建物をモチーフとしていたか記憶していなくてはならず、リテラシーの有無が試されることになる。ボグgs紙幣はホンモノの紙幣の似姿を採りながらアート作品としてはホンモノであり、他方、ホンモノの紙幣は、アート作品としてはオリジナルを欠いたコピーとしてしか存在し得ない。こうした逆説から、本章は紙幣と文学の共通する性質を抽出し、両者を同時代が生んだフィクションとして巧みに併置する。

第二章「複製への抵抗——バートルビーと貨幣、そして解釈」では、ハーマン・メルヴィルの短編「代書人バートルビー、ウォール街の物語」(1853)を、貨幣の働きと重ね合わせながら、複製への抵抗として読む。法律事務所の代書人バートルビーが仕事を拒否する際の決まり文句「できればそうしたくないのですが (“I would prefer not to”)」は相手からの問いかけへの返答として作品の中で繰り返される。しかし、作品の中には唯一彼が返答としてではなく自分からの発話として“prefer”を使い、やがて事務所の同僚たちに“prefer”が伝染していくというある種コミカルな場面があり、ここでの彼は自分のオリジナルな言葉である“prefer”が濫りに複製されることに怒りを表明しているかのように映る。これを「バートルビー」出版当時の混沌とした貨幣状況に鑑みて読み直すと、大量の偽札が出回った当時、紙幣の真贋は *Counterfeit Detector* や *Bank Note Reporter* といった印刷物によって確認されたが、この印刷物自体が偽造可能である以上、真正性はどこまでいっても担保され得ない。作中でさりげなく触れられるだけのモンロー・エドワーズという実在の偽造家の詐欺事件にも見られるように、発行記録がないのにホンモノとして流通していた紙幣同様、一度貨幣として通用してしまえばホンモノではない貨幣であっても、貨幣として通用していることを根拠に貨幣となりうる。それはバートルビーが書類の確認を拒否し、複製に抵抗しながら抵抗そのものと化し、表象の原理そのものを問い直す道筋を逆照射する。

第三章「『ぼろ着のディック』の ^{アピアランス} 見た目／出現——読むこと、読まれることと社会的上昇」では、ホレイショ・アルジャーの手による19世紀中頃のアメリカを代表する児童小説『ぼろ着のディック』(1868)を扱う。本小説は貧しい生まれの主人公が努力・勤勉・節制を通じて上昇し、立身出世していく様子を描いた物語として知られているが、主人公のディックは物語の序盤においては文字の読み書き能力を持たず、自分で売っている新聞に何が書いてあるのかもわからず、騙されて真札を偽札扱いされて騙し取られそうになるほどである。各地の銀行が自由に紙幣を発行し、総数1万種類近くの紙幣が流通していた19世紀半ばのアメリカにおいて、やがてディックは都市のリテラシーを持ち、交通を読み詐欺師の心理を読み、逆にやり込めるほどになるが、実はディックの上昇を保証していたのは高級なスーツをもらったことなどによるディックの見た目の上昇であり、それは当時の偽札が銀行の発行地(出自)や額面(階級)を偽った構造の反復であったことを考察する。

第四章「トウェインの書いたグラントのサイン——「どちらが夢か？」とサイン・主体・金銀複本位制」では、マーク・トウェインによる未完の短編「どちらが夢か？」において、ユリシーズ・グラント将軍をモデルにした少将がジェフ・セジュウィックという部下に仕

事を任せた結果、ジェフにその筆跡をコピーされ、自分のダブル（分身）であることを許してしまうばかりか、自分の主体そのものが乗っ取られてしまう展開に注目する。この設定が興味深いのは、トウェインは自分の作品の中でもホーラス・グリーリーの悪筆を偽造して内容も別物の手紙を偽造してみせたからである。折しもこの作品が執筆されていた当時のアメリカでは金本位制と金銀複本位制をめぐる議論が勃興していたため、金と銀という二つの価値物が、貨幣という地位に就くべくその正当性を争っていたという経済的文脈が人物造型にも反映していたのではないかと考察する筆鋒は鋭い。そしてトウェインとグラントの晩年の類似から、X少佐というキャラクターは、いわば「トウェインが書いたグラントのサイン」ではないかと見る展開は説得力溢れる。

第五章「紙の上のエメラルド・シティ——『オズの魔法使い』と紙幣制度」では、ライマン・フランク・ボームの『オズの魔法使い』（1900）を19世紀末の金本位制と金銀複本位制をめぐる争いのアレゴリーとする読みが伝統的に存在することを前提に、金銀に加えてもう一つ頻出する色である緑が南北戦争時に発行された不換紙幣（グリーンバック）を思わせることに着目し、このアメリカ初の童話に新たな洞察を加える。エメラルド・シティではすべてのものが緑に見えるが、それは緑のメガネをかけているからであり、オズ大王が自らを呼ぶ「詐欺師（“humbug”）」という呼称が、かつて金貨支持者に対する紙幣論者への揶揄として使われていたように、オズとエメラルド・シティには紙幣的な含意が読み込める。オズはドロシーたち一行の願いを叶えないのに、叶えた気にさせる。それは「ふりをしている」と同時に「信じ込ませる」行為である。『オズ』が出版された頃の紙幣のデザインを読んでわかるのは、電気や蒸気など目に見えない力を新たなエネルギーとして讃える様子であり、それは表面的には不可思議な現象を、実際には機械仕掛けの科学の力で引き起こしていたオズ大王と同じ働きを示している。オズ大王のモデルのひとり、発明王エジソンが「メンロ・パークの魔術師」と呼ばれたように、科学と魔術が不可分だった当時の様子を彷彿とさせる本作は、詐欺と科学、そして紙幣をめぐる物語であることを解き明かす。

第六章「カンパニー・リミテッド ジャック・ロンドン 有限会社 ——『暗殺局』における作者と資本主義」

が中心に据えるジャック・ロンドンの『暗殺局』（1963）は貨幣を媒介として暗殺を請け負う暗殺局という組織について書かれた小説で、そこにはニーチェの「超人思想」の影響や社会進化論、暗殺という題材など、非常にロンドンらしい要素が見られるにも関わらず、まともな研究対象として取り上げられないことがないのは、プロットがロンドン自身の手によるものではなく、のちにアメリカ初のノーベル文学賞受賞者となるシンクレア・ルイスの発案によるものであったためである。ところがロンドン自身はルイスのプロットに基づいて作品を書き進めたものの、これを完成させることができないまま40歳の若さで亡くなってしまふ。その未完の作品に結末をつけたのはミステリー作家のロバート・L・フィッシュであった。かくして『暗殺局』はロンドン一人ではなく、三人の作家の手によって作られた作品で、それゆえロンドン研究にとって扱いが難しい。しかしロンドン自身が意識していたように資本主義社会における出版の世界で重用されるのは作品の価値そのものよりも作者

の名声であり、本書が現在出版されたのも、それが共作によることで逆説的に「ジャック・ロンドンらしさ」をみごとに表象しているからだ。それは、ロンドンが活躍していた19世紀末のアメリカでは、個人ならぬ「法人」が独り歩きするようになったことと無縁ではないと見る視座は斬新である。

第七章「広告に似る男——『グレート・ギャツビー』と時間と貨幣」ではF. スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』において、デイジーがギャツビーに対して発する「あなたは広告に似ている」という奇妙な発言を出発点に、ギャツビーが建国の父祖ベンジャミン・フランクリン的なセルフメイドマンであるのは自明ながら、フランクリンが「時は金なり」と説く自己目的的な貨幣獲得とは逆に、獲得貨幣を「過去を取り戻す」ために散財し、金を時間に交換しようとしていたことに焦点を絞る。そしてモダニズム勃興期にGMが持ち込んだ自動車のモデルチェンジのごとく、ギャツビー本人のパーソナリティがモードの流れに追い越され時代遅れとなって命を落としたことに、時代の必然を見る。

第八章「ウィリアム・バロウズは地域通貨の夢を見るか？——紙幣に見るアメリカのグローバリゼーションとオルタナティヴ」では、カンザス州ローレンスの地域通貨リアル・ダラーを飾るウィリアム・バロウズの肖像に注目しつつ、フランクリン的な増殖する貨幣およびそれに基づく資本主義というシステムがすでに世界に歪みを起こし、グローバリゼーションの名の下に世界的な富の不均衡を生じさせている文脈において、市場の原理のみで移動し、増殖し、共同体の外に富を流出させてしまうドルに対し、共同体の中に留まる地域通貨リアル・ダラーの意義を確認する。バロウズはその著作において、麻薬が時間を食べ物にして欲求を育て、ジャンキーへの支配を強化していくことを指摘するのみならず、その機能を貨幣の機能と重ねてみせた。さらにバロウズがこだわった「言語ウィルス説」に鑑みるなら、ウィルスというメタファーには、人間を宿主として逆に支配し、グローバル化した世界を食いものに自己増殖していく資本としての貨幣ばかりか、時間や麻薬までもがオーヴァラップする性格があることを、著者は喝破する。

第九章「(E)X Marks the Spot——ポール・オースター『ブルックリン・フォリーズ』と9.11後のリアリティ」はポール・オースターの2006年の作品『ブルックリン・フォリーズ』に焦点を絞り、主人公ハリー・ブライトマンが、アレック・スミスという画家の死後にその贋作の販売に手を染めるばかりか、ホーソーンの『緋文字』の「税関」の原稿偽造を計画する歩みを分析する。絵画の贋作はサインさえ入れなければ贋作ではないが、一方原稿の偽造は書物のオリジナルな原稿の捏造である。そこにはアメリカの文豪ホーソーンへの長年の敬意を窺うことができるが、最終的にオースターが前景化するのは、事実であろうがフィクションであろうが重要なのは物語の力だという一点だ。そしてラストシーンが9.11同時多発テロ直前のニューヨーク・シティの朝で終わることからも推察されるように、本書は9.11以降アメリカのリアリティが変容してしまい、あの事件を境にex(過去)になってしまったかつてのリアリティへの、そしてそこに存在していた、いまは失われてしまった物語の力への憧憬として読むことができると著者は説く。

「おわりに」では、本研究が期せずして白人男性作家を中心にする事となった経緯を、

アメリカ紙幣に掲げられる肖像自体が白人男性のみによって占められてきた事実と重ねている。それはアメリカ紙幣の多様化が未来の課題であること、この問題がいまの保守化したアメリカが建国の理念を堅持しうるかの試金石であることを暗示してやまない。

審査の要旨

秋元孝文君の博士学位請求論文『ドルと紙幣のアメリカ文学—貨幣制度と物語の共振』は、紙幣と文学作品をともにテキストとみなしてその類似点に注目しつつ、19世紀から21世紀に至るアメリカ文学作品を同時代の貨幣制度の観点を導入して論じた野心作である。著者の関連研究は、すでに日本英文学会とアメリカ学会の厳密な査読制度を持つ学会誌に発表されており、それぞれ本書の第三章および五章の原型を成している。これまで市場や経済、資本主義や労働といった観点からアメリカ文学を読み解いた研究はジャン＝ジョセフ・ゲーやマーク・シェル、ウォルター・ベン・マイケルズなど数多く存在するが、本書のように特に「紙幣」に注目してアメリカ文学を読み解いた研究は極めて独創的であり、アメリカ文学研究全体に大きな貢献をなし得る成果である。

序章と終章（「おわりに」）が挟む九章から成る本書は、テキストとしての「紙幣」を中核に据え、「本物」と「贋作」、「誠実」と「欺瞞」、「文学的価値」と「商品的価値」といった伝統的な区別を転倒させることを主眼とした文学研究である。ある種の解釈共同体の上に成り立つ「貨幣」のシステムと、近代に誕生した「本当の物語」を前提とする小説という制度そのものを比較するという着眼点は興味深く、いわゆる経済小説や反資本主義的なプロレタリアート文学研究とも異なる視座を提示するものだ。紙幣と小説の類推を経て、言語行為そのものによって誕生したアメリカ合衆国という国の特殊性にまで迫る本書は、アメリカ・国家・紙幣・小説の有機的な関係性をあぶりだし、18世紀のベンジャミン・フランクリンから21世紀のポール・オースターまで二百年に及ぶアメリカ精神史を再構築しようとする、意欲的な論考である。無論、長大な時代を扱っているために、類似の主張が各章で反復されるものの、しかし、例えば、第七章において今日では100ドル札の肖像としても利用されている18世紀のアメリカ紙幣の父祖フランクリンについて論じた後、続く第八章では2000年に発行された地域通貨の肖像となったウィリアム・バロウズを分析することにより、フランクリンの自由主義の現代的な行き詰まりを見事に露呈させるといった絶妙な捻りも加えられているので、長大な歴史を視野に収めた時代横断的な視点は、むしろ本書の最大の長所のひとつというべきであろう。

全体として読みやすくわかりやすい研究書であり、またアメリカ文学のみならず広く文化・歴史の「読み方」を提示してみせた点では一般読者を意識した読み物にもなっている。また、ジャンルや権威の枠組みに囚われないしなやかな分析態度も好ましい。それは導入部で開陳されるアートとしてのボグズ紙幣に関する議論が、続く文学作品考察の各章へとスムーズにつながっていくという構成の妙にも、すでに現れている。

もちろん、野心的な研究には、将来的に克服されるべき部分がつきものである。以下、審査委員会が2019年3月20日（水）の午前中に研究室棟地下第一会議室で行った秋元君

との口頭試問に基づき、そこで浮上した問題点を掲げる。

まず、本書がテーマ設定上「紙幣」と「文学」の対照から始まるのは当然としても、ではなぜ金属貨幣（コイン）が除外され「紙幣」だけが特権化されるのかをより明確にすべきだったのではないか。また、全体を通読すると、貨幣論以上に印刷物という大量生産形態にもなう「贋作」と「本物」の区別の危うさに力点が置かれていく。だとすれば、この問題を最も真摯かつ執拗に追究し、名作短篇「本物（“The Real Thing”）」（1892）をも残すヘンリー・ジェイムズを本書が一顧だにしないのは由々しき欠落ではあるまいか。

第二章の「バートルビー」論は原題“Bartleby, the Scrivener”が示す職業を、著者の解釈する通り書写人と見るならば中世の写字生（transcriber）を連想せざるを得ないけれども、そうすると“scrivener”にもともと含まれていた三文文士ないし無名作家的なニュアンスが失われてしまう。当時のメルヴィル家において、作家の原稿をまさに代書ならぬ清書していたのは名もなき女性の家族たちであったことはすでにエリザベス・レンカーの先行研究が示す通りだが、本書では一貫してそうしたセクシュアリティの問題は顧みられない。

第四章のトウェインによるホーラス・グリーンリー書簡の偽造の議論に関しても、問題の書簡が登場する『西部放浪記』では、ハワイで出会った狂人の男が語った話という文脈で出てきており、この話全体の信憑性が疑わしいというのが前提であろう。従って、書簡そのものを偽造というレベルだけで論じるのではなく、偽造であることをむしろ前提としたパロディや笑いといった観点や、人間自身の商品的価値をめぐるセレブリティ文化史も取り入れて論じることができれば、より広がりのある議論が展開できたはずである。

また、本書の通奏低音であるフランクリンの捉え方にしても、儉約の倫理観とともに紙幣の獲得を臆せず唱道した自由市場の牽引役といったイメージに依拠して議論が展開しているものの、同時に彼が紙幣の獲得とともに郵便制度、消防制度、図書館、また大学の創設といった公共の利益のために働くことをも人生の最大の目的とした点についても一言触れるべきではなかったか。おそらく貨幣制度も円滑に経済を展開させるという意味では公共の利益に根ざした要素を多分にもつ制度であるはずなので、公的利益といった観点を導入すれば議論の偏りを是正することができたかもしれない。

最後に、これは内容というより書式の問題だが、各記述に基づいたはずの典拠の明記や先行研究、ならびに資料の明示や解説が、非常に雑駁である。特に序章は、この本の着想と記述の枠組み、時代背景を一気に示す非常に重要な章であるにも拘らず、16-17ページにいくつかの研究書が列挙されているだけで、それらの本を参考にしたのは明らかであっても、ウェブサイトを含め厳密なページ引証がほとんど行われていない。それは非常に興味深くかなり珍しい銀行券等の図像の出典についても同様である。加えて、文中内引証と註によるものとの混在しており、統一性に欠ける。

とはいえ、以上の諸問題は、本書の内容が読み手の関心を喚起する大きな刺激に満ち満ちているからこそ指摘せざるを得ないものであり、この力作の価値を損なうものではない。よって審査団一同は秋元孝文君の論文を博士（文学）の学位授与にふさわしいものと判断する。（2019年4月10日）